真桑文楽『蓮如上人一代記』について

蒲池勢至

一

岐阜県本巣郡真正町上真桑本郷に伝わる真桑文楽は、毎年三月二十・二十一日の氏神物部神社祭礼に上演される。ここに紹介する蓮如上人一代記（嫁威の段）も、その外題の一つである。舞台は神社境内に設けられていて、間口一二・九八米、奥行八・二三米の堂々たる人形舞台であり（国重文指定）、太夫座・廻り床・田楽返し・三段返し等の舞台機構もある。明治初年の建築といわれ、それ以前は仕組み小屋であったという。

真桑文楽が、いつ頃から行なわれたかについては従来二説あって、まず元禄年間発生説である。この地は根尾川水域に位置し、真桑・席田両潅漑用水の争論に尽力して井水の制を確立した福田源七郎（片目の源七郎ともいわれ元禄五年没）への報恩のため、「美濃源七郎」という外題の操人形を上演したのが起源といわれる。この伝承を証する史料は何もないが、美濃源七郎の後裔で十五代目にあたるという庄屋筋の家は今もこの地にある。また三十年程前までは、同じ神社境内の観音堂に安置されている人形の蛙頭を旱魃の時に持ち出して、「もったいない、もったいない」と言いながら用水に放り込み、「雨降らす、雨降らす」といっては拾い出した雨乞が行なわれていたという。いま一つの発生伝承は、寛政から文化（一七八九～一八一八）の頃に大阪の人形遣大文吾と、その子米八・金吾の親子三人が病気療養のために来村、村西の法英寺という庵寺に十五年間住みつき、村人に人形遣いを伝授したというものである。そして、金吾は帰阪後に大和屋桐竹門蔵になったともいわれている。神社拝殿の両側にある保存庫には、男役五十三個、女役十九個、他五、合計七十七個の人形頭（カシラ）が保存されているが、その頭の中には、吉田金吾（大カニ）の銘、また琴手に「桐竹門蔵」、胴と肩板に「門蔵」の銘がそれぞれ入っているものがあるという。また、地元の守

屋明雄氏は数十冊の稽古本を所蔵しており、その中には延享四年、明和六年、安永十年、寛政十一年版のものがある。こうしたことから、十八世紀中頃には現在のような三人遣いの人形芝居が演ぜられていたことが推定できる。

明治以降の真桑文楽については『真桑人形郷土芸術覚』があって、明

太功記十段目	二〇九	先代萩御殿	一〇一		
安達原三段目	八五	辨慶上使の段	七八		
三勝酒屋の段	七四	朝顔日記宿屋	六五		
阿波鳴門	五三	壷坂沢市の内	四〇		
寺児屋	三八	箱根霊験記滝の段	三七		
日吉丸三段目	三一	忠臣蔵六段目	二九		
三十三間堂	一七	逆櫓	一七		
熊谷陣屋	一七	鈴ヶ森	一七		
弥次喜多赤坂並木	一七	鎌倉三代記	一五		
玉藻前	一六	忠臣蔵三段目	一六		
妹背山	一〇	野崎村	一〇		
お俊伝兵ェ堀川	一〇	八百屋お七	一〇		
加賀見山又助住家	九	吃又	九		
嫁おどし	九	朝顔日記大井川	八		
本朝廿四孝狐火	八	阿漕浦平治住家	七		
佐倉宗五郎子別	七	千本桜すし屋	七		
摂州合邦	六	忠臣蔵四段目	六		

治三十二年から昭和四十九年までの上演年月日・場所・外題・太夫名などが詳しく判明する。昭和四十七年までの実演された外題を整理された景山正隆氏の統計表によると、上演外題回数は上表の通りである。(1)「嫁おどし」は合計九回、大正九年三月・昭和三年四月・同二十五年三月と四月・同二十六年四月・同二十七年四月と十月・同二十八年九月・同四十六年四月、と上演されていた。昭和四十八年三月にも上演されているが、それ以後は中絶してしまい、昭和五十九年から再び復活上演されるようになった。上演場所をみてみると、三月の氏神例祭奉納よりも蓮如上人四百五十回忌・弘法大師御開帳中日祝・入仏慶讃法会等の時に出張して、寺院や他所の神社で上演されることの方が多かった。寺院法会の際に「嫁おどし」は、正に格好な出し物であったといえよう。

現在、真桑の本郷地区は戸数一一〇戸で川原・川東・川西・三屋西境の字に分れている。大正初年から昭和にかけて人形遣いのできる者は僅か一五・六名であった。七年程前に保存会が結成され、青年部（二〇～四〇才）八十余名、婦人部八名、老人組七名の構成で、義太夫七名、三味線二名となっている。師匠として岐阜市在住の竹本勝昇氏を招くが、同氏は十七才の頃から母親について全国を回った人であるという。

二

真桑文楽に『蓮如上人一代記』として嫁威の伝説が浄瑠璃化され、今

日まで伝承および上演されていることは珍しく、また貴重な民俗芸能であるといえる。もともとこの伝説は、周知のように福井県坂井郡金津町吉崎に伝わるものであった。いまも吉崎の願慶寺と西念寺には「肉附面」が寺宝としてあり、参詣者に対して縁起と面の由来を語っている。願慶寺の「真正嫁威肉附面縁起」をみると「慶長十六年辛稔開版」とあって、以後、貞享二年と文化十一年に改刻、そして昭和五十九年四月までに四千版も発行されている。築瀬一雄氏が碧冲洞叢書第六十八輯に翻刻された「嫁威肉附面略縁記」は、願慶寺で現在も発行されているものと全く同じであった。近年、中野猛氏が翻刻された岩瀬文庫蔵の『蓮如上人御教化嫁威谷物がたり全』は弘化四年（一八四七）のもので、挿図が入り物語化している。

どのようにして吉崎の嫁威肉附面の伝説が成立し、また戯曲化・物語化したのであろうか。以下、肉附面の系譜をたどりながら概略まとめておきたい。

この伝説が御伽草子『磯崎』と関係していることは、これまで既に指摘されている。磯崎殿という武士が本領訴訟のため鎌倉に滞在中、契りを結んだ新しい女房を連れて帰った。古い女房はこれを妬み、猿楽師から借りた鬼面を着けて新しい女房をおどかし打殺してしまう。ところが、面がどうしても顔から離れない。そこに日光山で修業していた我子が来て説法し、女房は憎しみを捨てると面が取れるので改心して出家する。そして磯崎殿も出家した、というものである。[2] 肉附面の伝説が嫁と姑との関係であるのに対して、『磯崎』は本妻と後妻の関係であり、いわゆる後妻打（うわなりうち）の物語である。しかし、肉附面型の話であることは共通している。成立年代について沢井耐三氏は、元亀・天正まで遡りうるかどうか疑問で近世に近い成立ではないか、と述べてみえる。[3]

この肉附面の趣向を浄瑠璃に取り入れたものに『北条時頼記』があった。西沢一風・並木宗助（輔）・安田蛭文作で、享保十一年（一七二六）四月八日に大阪豊竹座で初演されている。この作品は、不況であった豊竹座の起死回生の作で大当りとなり、各地で興行された。『尾陽戯場事始』[4]や『続尾陽戯場始志』[5]によれば、享保十六年九月・同十七年三月・同十八年六月・同十八年七月・延享四年九月に上演されている。特に、享保十八年の六月と七月は同じ笠屋仙右衛門座によるもので、「盆前の儘にて興行。七月十五日ゟ又々北條時頼記」とあって盛況であったことがわかる。肉附面は四段目に見え、嫉妬に狂う玉豊姫は鬼面をつけて時頼の本妻月小夜を襲うが、父二階堂道秀に捕えられる。玉豊の面は肉にくいついて離れない。これを見た時頼が剃髪して経文を唱えると面が取れ、時頼は玉豊を尼として回国の旅に出る、という展開である。[6] やはり嫁と姑の関係でなく、『磯崎』と同じ本妻と後妻という関係に肉附面が登場しているのであるが、浄瑠璃化されている点に興味がある。

ところで、この肉附面の趣向を浄瑠璃に取り入れたものとして『北条時頼記』[7]がこれまで指摘されてきたが、天理図書館蔵の『源海上人』中

に既に浄瑠璃化されていた。これは親鸞を題材とした古浄瑠璃親鸞物の一つで、出版年次が延宝末から天和初年頃といわれるから『北条時頼記』よりもはやい。武蔵国の住人駿河守藤原朝臣隆光が鎌倉頼経公の従五位上叙任の理由で出かけることや、隆光の北の御方花寿御前と遊君月寿が登場することなどは、『磯崎』の構成に似ているといえよう。肉附面は四段目と五段目に見える。北の方花寿御前の御母が、隆光の跡を継がせようとした花若丸（花寿の弟）が亡くなったこと、また娘の花寿も遁世してしまったことを恨んで、遊君月寿を襲うところである。その場面を少し見てみよう。

老母（地色）中此よし聞たまひ。何花寿めハわらハをすていづく共なく見へざるとや。是といふも月寿め故とかく子共（供）のかたき也（地色）。おのれ（地）そのままおくべきかにくしつらしとねたミ置。いきくびにくひつきてせめて思ひをはらさんと。きぎやう（鬼形）の面をもとめ俄に。しやうぞく（装束）あらためてさもおそろしきてつぢやうを月寿のやかたへ三重〜〜参らるゝ。……

（中略）……ねたましやとおどりあがりとびあがりてう〳〵〳〵ど打よりミれバ。はやこときれていきたゆる。うれしや（地）な今こそハ。思ふかたきを討たれうたれて思ひしるらめ。つゐにハはるゝむねのけふり（中ナラズギン）立やす〜〜らひてゐたつしが。あらうつたうしきづまりやめんをぬがんと思ひつゝ。とれ共〳〵おちざれバふしぎに思ひをしはなせど。（地色）くびこそのびていため共めんのおつべきけしきなし。（中ウ）

鎌倉滞在中に月若（月寿の子）と花若の死を聞いた隆光は、「常陸国横曽根の平太郎。今生仏聖人」の弟子となって仏道修行をしている。そこに、救世菩薩化現の駒に導かれて鬼女となった老母が現われ、

かゝるきどくも存ぜずし。そしり申せしもったいなや。ぜひにたすけてたべとわが源海（色）聞召。詞アヽ念仏のふしぎにかくさうあゝの女人たやすく浄土に生るゝこそふしぎの中のふしぎなれ。しからバそれにてつくりにしつミとがをかいけして。（改悔）（地色）念仏を申されよとをしへたまへバかうし（高唱）やうに。な無阿ミだ仏ととなふるこゑの下よりも。きじよのすかたたちまちにしやうそう（聖僧）のかたちに成くハうミやうよもにかがやけバ。（光明）（四方）

と語られるのであった。[8] このように古浄瑠璃親鸞物の中に肉附面の趣向が取り入れられ、さらに本妻・後妻の関係が展開して老母が鬼形となり、我身の邪見さを改悔して念仏を唱えると鬼女の姿が聖僧に成ったとする点などは、嫁威が浄瑠璃化される原型が既にでき上がっていたと言えよう。しかし、吉崎の嫁威縁起そのものが浄瑠璃化されるには、まだまだであった。

寛政十一年（一七九九）の八月八日より大阪山下亀松座で、『雪国嫁威谷（ゆきのなごしだに）』という歌舞伎が上演されている。『歌舞伎年表』によれば、寛政十二年閏四月九日に京都の蛭子屋座・天保八年（一八三七）九月に大阪・文久元年（一八六一）三月に京都南側芝居で上演された。また、『猿猴庵日記全』の享和二年（一八〇二）九月には「大須芝居二の替り、大阪新狂言北国嫁落谷（ヤラ）并長寿おもかげの鐘入といふ所作を出す」[9]とあって、名

古屋でも演ぜられている。題名からすると吉崎嫁威縁起の歌舞伎化と思われるが、松平進氏は「外題に反して、蓮如上人や肉付面の嫁おどし谷説話には関係ない内容である」[10]と、わざわざ述べている。ただ、ここに至ってはじめて嫁を谷間に待ちぶせて殺すという嫁殺しの趣向が見られるのは重要であろう。というのは、寛政十年は蓮如の三百回忌にあたり、吉崎の嫁威肉附面縁起は全国的に流布していたと考えられるからである。この頃に各種の蓮如伝が成立しているし、また各地で制作された『蓮如上人御絵伝』には、必ずといってよい程に嫁威の絵相が描かれた。説教や絵解きによって、この伝説は盛んに語られたであろう。[11]『雪国嫁威谷』は、肉附面が出てこなくても明らかに吉崎の嫁威肉附面縁起を意識して歌舞伎化したものといえよう。

この寛政十一年初演の『雪国嫁威谷』とよく似た外題ながら内容を異にするものに、『嫁おどし谷』（『北国嫁おどし谷』）があった。これは市川右団治が明治三十五年二月大阪浪花座で初演したもので、明治十九年五月より大阪彦六座で初演の浄瑠璃『三陀本願三信記』を脚色したものという。[12]『歌舞伎年表』によると、明治三十五年十一月に京都南座・同三十七年大阪天満座・同四十年三月に宮戸座・同四十年六月に明治座などで上演されている。この『嫁おどし谷』こそが、加賀国十楽村の吉田与三治の妻お清を鬼面で威した姑が蓮如上人によって教え導かれるという、吉崎に伝わる嫁威肉附面縁起を歌舞伎化したものであった。そして、真桑で『蓮如上人一代記』として上演される嫁威の一段も、歌舞伎化された『嫁おどし谷』がさらに浄瑠璃化されたものであったのである。

註

(1) 『岐阜県無形民俗文化財記録作成報告書』第六輯「資料真桑人形郷土芸術覚」・昭和五十三年・岐阜県教育委員会。
(2) 『室町時代物語大成』第二巻、美濃部重克「室町物語『いそざき』の伝本の形態」（『伝承文学研究』第二十号・昭和五十二年）、沢井耐三「お伽草子『磯崎』考」（『古典の変容と新生』・昭和五十九年・明治書院）。
(3) 註(2)に同じ。
(4) 名古屋叢書第十六巻『風俗芸能編(1)』。
(5) 名古屋叢書第十七巻『風俗芸能編(2)』。
(6) 『演劇百科大事典』・『日本古典文学大辞典』等参照。
(7) 織田顕信「天理図書館蔵加賀掾正本 古浄瑠璃『源海上人』について」（『同朋仏教』第六・七合併号・昭和四十九年）。
(8) 註(7)に同じ。
(9) 名古屋叢書第十七巻。
(10) 『日本古典文学大辞典』「雪国嫁威谷」の項。
(11) 拙稿「『蓮如上人絵伝』覚書」（『名古屋教学』第三号・昭和六十一年）、関山和夫『説教の歴史的研究』・昭和四十八年・法蔵館・三一七頁。
(12) 『演劇百科大辞典』参照。

付記　本稿は「まつり通信」（二九五号）に報告したものに加筆し、台本を全文翻刻したものである。調査にあたっては、保存会の方々にお世話になった。ここに記して感謝する。

〈凡例〉

一、台本は、かつて上演した時に使用されたものの一本で写本である。袋綴、二八・二×二三・七、六十三丁。
一、本文は追い込みとしたが、幕の区切れ箇所だけ改行した。三幕で上演されるので、（　）を入れて明示した。
一、明らかな誤字は訂正したが、宛字はそのままにした。

蓮如上人一代記　嫁威の段　〔表紙〕

蓮如上人一代記　囲　嫁威の段　〔内題〕

蓮如上人一代記　嫁威の段

（第一幕）

越路なる　四方の山々白妙に　木枝も埋む冬景色　「こゝに吉田与三治と云ふ百姓あり　元は樋山の家中にて　筋目正しき武士も　今は貧しき賤が業　気も吉崎の片辺り　十らく村に仮住居　夫が留守も抜目なく如才内義は糸つむぎ　廻る車の暮昏前　」表へいそ〳〵　講中太郎作お清女郎せいが出ますの　今夜吉崎の御堂に　上人様の御勧化が勤る故　参らしやるまいかとついで乍らよりました　「女オゝそれはようおさそい下されました　ガ参詣したいは心一杯なれ共　かゝ様は仏ぎらひ表立つては参られず後より首尾を見合せて　御教化に預りませう　シタガ申し太郎作さん幸今日は由松が命日　御坊で御経を上げて下さる様はばかり乍ら頼みます　女オゝ是は又有合わせの物なれども　上人様へお上げなさつて下されませ　と「傍なるじんぎ押包み　講中が前にさし出せば　男「是は〳〵は御奇特な早速上人様へ御渡し申し　御回向上げて貰ひませう　そんなら先へ　と「気さんじに　御堂をさして　急ぎ行く　」女お清は後を打見やり　ほんに信者はア親切な者じやな　それに引かへ母様は強欲非道な我まん心　どうぞお心やわらがば　何ぼ私しが嬉しかろ　「御機げんの折々にお勧め申せど　中々に　おきゝ入れなされぬはいかなる悪鬼の業なるかと　思ひこうじている折から　三味とつかは戻る此の家の母徳利引提げ片手には　おのれ一人の好物　姿心も捻金婆　門口より声高に　詞コレ　嫁女わしが留守になると　糸車はいつでも宿がへ　のらかわくも程がある　と　つぶやきあたりをねめまわし　最前わしが出して置いたじんぎの綿は二百目斗り　爰にないがどうしたぞ　「イヤアノ　其の綿は　「オゝそれそれお前が留守に木綿買が来て手本に貸せと持つて行きました　「パパフムン　木綿買の商人が糸の手本なら持つてもいのが　綿の手本を何にするぞ　おのれや　コリヤくすねて売りさらしたな　サ　有様にぬかせ　ぬかさなこうじやと　有合う帚

目鼻も分たずつづけ　打　打たれて何と云ひ訳もせん方涙にくれいたる　「パパ　オ悲しいこつちや　もつととこぼえ〳〵〳〵　此の母の目をかすめ　仕事の綿迫売りさらす盗人根性　まだ是斗りじやない　此の間からおかしいそぶり　毎夜〳〵出て行くはアリヤ一体何処へ行く〳〵ムヽ返事の無いは　コリヤ外に隠し男が出来たのじやな　ァァめつそうな何の私が其様な大それた事致しませう　そんなら綿は何とした　「女それは　「隠し男にやつたのか　さあ〳〵〳〵〳〵と詰かけて又立ちかゝり丁丁〳〵　打たれ乍らも手を合わせ　只お赦しと斗りにて外に詞も泣く斗り　「パパァァ　是程迫に折檻しても白状せぬは男が有るに極つた　此の上は是非が無い伜に代つて縁切つた　サとつとと出て行け〳〵　エヽ　とつとと出て行け　「　泣入る嫁を引立けたて　門へ押出し戸をぴつしやり　母は納戸へ入間の鐘も哀を添へにけり　「外にお清は只一人　涙乍のかこちごと　ほんに思へば此の身程因果な者が世にあろうか　實の父には死に別れまた母様は目の病　薬の代に十四の年　三國の里へ身を賣られ苦界七年うきつとめ　年の明くのを待つ内に　フトなれそめし与三治さん互につぼみの若緑　内へ入れよと嬉しいおほせ　親御の手前中立に　太郎作さんをお頼み申し　主と一つの此の住居　貧しい中も好いた同士　つらいくらしはいとわねど　ァノ母様の胴欲心　今日も今日とて此の有様　我子の忌も明けぬ内　姑去りとはあんまりな　むごいはいのと身をもだへ　歎きひれ伏す其の所へ　立帰る吉田与三治うすくらがりの急ぎ足　どうとつまづき　ヤ是はしたり唯じゃ〳〵　ヒョウお清此のくらひに門口に「　女オオこちの人よう戻つて下さんした　けうお前が留守の間へ太郎作さんがお出なされし故　幸今日は由松が命日なれば上人様に御回向をお頼みなされて下されと有合ふ綿を御坊へと託つけました　其の後へお歸りなされて母様が綿の詮議に色々の難題　吉崎様へ上げましたと口迫は出たれども　常からお前も知つての通り機嫌の悪るいは知れた事　それ故私がかくしたら　踏ず叩いつした上で　お前に代つて縁切ると　モそれは〳〵きついお呵り　どうぞ詫して下されと　涙と共に物語れば　始終の様子聞く与三治　母に聞する怒り声　「コレヤ女房もう聞かいでも知れてある　それやそちが悪いのじや　なぜに綿を自儘にした　母者人の腹立は尤　サちやつと這入つてお詫び申せと　「云ひつゝ内へ伴ひ入る　「姿見るよりやんがん声　コレ与三治其の挨拶は聞きませぬ　今日も私しが留守の間に綿をくすねて　「サ男　共の訳も聞きましたが　今迫の事は私にお任せなされて

下されませ　お清はさつと折檻を　「ババムヽそんならそなたが受取つて　アア仕合せな女郎め　どうなりと勝手にせい　アアア〳〵くたぶれた〳〵　ドリヤいてねようと　つぶやき〳〵母親は　納戸へ行けば　ソレお清火をともして母者人のお床を　アイ〳〵合点と女房が押入明けて取り出だす　油染みたる桐枕夜着引抱へ入りにけり　与三治は後に独り言　水の流れと人の行末　元は樋山の城主細呂木何がしの家主なれどお家没落より此の十らくへ来て百姓業　何卒主家を引き起さんと　つらいひんくをこらふれど　アアさぞ女房もつらからんと　しばししほれて居たりしが　一間をそつとお清は立出で　コレ　こちの人思わぬ事で母様のお腹立　是と云ふのも私しがぐどんから　さぞお前はめいわくにござんせう　ガ勘忍して下しやんせ　シタが今日は由松が命日　モウ御勧化が勤まる時分　お前もちよつと吉崎へ　サわしもさうは思ふて居れど母者人の御機げんが　イエ〳〵どうやらねてござんす様子　「オヽそんなら行こうか　「そうしやしやんせ　「アアコレ　しずかにしやと　表へ門の口かくし心をさし合わす　二人が中は吉崎の御坊をさして出でて行く　一間の内にそら寝の母　障子引明け後うち見やり　アレ程に意見をしても　毎夜吉崎参り与三治はともあれ　アノ女郎め　二度参ろうと云わぬ様　おどしてくれんとあたりを見廻し　是幸と取出す　家に伝わる春日の面　顔にかぶれば忽に　姿心も悪鬼の形相　在合ふ鎌を追取つて後を慕うて　フエ〳〵三重　「追て行くゥ〳〵

（第二幕）

爰も名にしおふ吉崎につづく垣原の村はつれ　けんその山道薮垣の葉を吹く風にさそわれて　遠寺の鐘も物すごき　強欲非道の心からおのが姿も鬼神の如く片手に鎌を携へて　勢込んで走り付き　物をも云わず茂みの中打うなづいてうかがひ居る　かくとは誰も白雪の　道もいとわず只一人　息せき戻る嫁お清　心に唱ふる称名もいとどしゆ勝に見えにけり　向ふへすつくと鬼の姿立ちふさがつて声をかけ　我こそは当國白山権現の使なり　汝毎夜吉崎へ参詣する事以ての外の御怒り　今より心を改め吉崎参りをかたく禁止し　一人の母に孝行盡さば其の通り　いなむにおいてはくひ殺さん　ト　おどしかくれば　見向もせず　オヽ喰ば喰め金剛の他力の信なよも喰むまいと　云ひ捨てしづ〳〵行きすぎる　鬼神はかつと怒りをなし　衿ぎわつかんで引戻し　ヤア神の使をあなどつて此の場をはづす大たんめ郎　思ひ知れやと鎌ふり上げ　打つてかゝれ

ば身をかわし　又打かゝる刀先を除けんとしたる肩先を　ずつかり切られてたじ〳〵　アツト一声倒れ伏す　すぐにまたがり胸いたへ　はつしと打込む有様は此の世からなる地獄の責むざんと云ふも餘りあり血押し拭ひ傍りを見廻し　アゝ思ひもよらぬ此の最後しかし此儘捨て置かれず　何処ぞよい所へ　オゝ幸此処の古池へと投込む折から向ふへ提灯　恂りはいもう驚きて面脱ぐひまもあらばこそ見付けられじと逸散に　我が家をさして立歸る。

（第三幕）

邪見に道もくらまぎれ　こけつまろびつ門の口　這入るやいなや我顔にかつぎし面を取らんとすれど　喰入る斗り　是はいかにと手に力　又取りかゝれば離ればこそ　身をもみあせる折からに表へ聞ゆる足音に是はと斗り押入へ　身をひそめてぞ忍び居る　かく共知らず主の与三治我が家の門の戸そつと明け　此のくらいに火も點さず何を居やる　お清〳〵　是はしたり先へ戻つて居る筈じやに　ハテ不思議なと云ひつゝも行燈取り出し火打箱　硫黄に移し居る所へ　こゝじや〳〵　と大勢連れ門口より声高に　これ与三治どん　今吉崎から戻りがけ垣原の坂道に血が流れてある故　そこゝとさがせば池に女の死骸　よく〳〵見れば お清女郎　皆恂りはしたれ共せん方泣く〳〵講中が　戸板に載せて連れて来た　よい人であつたのにむごい目にあわれた　と聞いて与三治は恂り仰天　暫し詞もなかりしに　オゝ驚きは道理〳〵代官所へお願ひ申し敵を取つてもらわしやれ　サアラバ〳〵と講中は我が家をさして歸りける　後見送つて主の与三治　死骸の傍に立寄つて　見れば切られた気色もなし　ハテ不思議なと死骸の懐中守り取り出し　よく〳〵詠め　ム絞る斗りの濡しずく　まつた六字の名号はすに切れしは　ヤ扨こそ〳〵　此の名名は一老の本光坊　火の中より取り出したる暁の名号　扨は身代りに立ちたまふか　ハハア　ハア有難し〳〵　此の上は女房に気を付けんと　土瓶のぬるまゆ口にふくませ　三味線　女房やいお清やいと呼びいけ〳〵　介抱に　心付きしか目をひらき　アアア　おゝこちの人気が付いたか　〳〵　申し〳〵与三治さん　私しや吉崎の戻り道恐ろしい者に出逢ひ　切られしと思ふたが其の後はゆめうつつ　コレヤ　女房そちが懐を見れば御坊で受けし暁の名号　はすに切れて濡雫　ヒエエ　そんなら名号のきずいにてわが身にけがはなかりしか　ハハア有難し／〳〵　と夫婦諸共手を合せ　うれし涙にくれ居たる　始終こなたに聞き入る母

堪へ兼ねて転び出でかくし持つたる以前の鎌　咽へかばと突立つれば
与三治はあわて抱きかゝへこは何故の生害と顔見て恂り　ヤア　母者人お
前の其の顔は　オヽ驚きはもつともぢやが一通り聞いてたも　毎夜夫婦
が吉崎のお参りをわしが気で　アヽうるさや憎さも憎しと此の面を冠れ
ば直に鬼の姿　垣原の薮垣にて待つとも知らず帰るお清が向ふに立ち
白山権現の使ぞと威せど更に驚かず　称名唱へて行く有様　にくさも
にくしと　コレこの鎌にて打殺し見付られじとかけ戻り　かぶりし面を
取らんとすれど喰入る有様　とやせん角とする内に　表に聞ゆる足音に
見付けられじと押入へ　我が見は何ぼかくしても　かくしおほせぬ此の
場の不思議　悪の報はコレ此の通り　嫁をおどした此の母がそなたへの
云訳ぞや　赦してたもれと斗りにて　日頃の我慢も何処へやらざんげを
してぞ詫びにける　始終を聞いてお清は恂り　そんなら最前薮蔭で鬼の
姿は母様か　オヽわしぢや嫁女赦してたもいの　今名号のきづいを見て
か程とをとひ上人様をまいす坊主の何のかのと　云ふた此の身は今
目前に　かつぎし面の喰入る斗り　今端のきわに御教化を聞かして下さ
れ　コレ嫁女　拝むわいのと身をもたへ手を合わせたる有様はそばで見
る目も哀れなり　」与三治涙を押拭ひ迚も無き身の母者人一時も早ふ上
人様へお願ひ申し　後世を助かる御教化を　オヽそうぢや〳〵と立上り
既に行かんとする折から　一間の内に声高に　ヤア夫婦の者吉崎に歩
むに及ばずとくより蓮如是に在りと　障子にうつる金色の　光と僮に立
ち出でたまへば　はつと夫婦は飛びしさり　コハ勿体なき如来の御出と
三拝九拝敬へば　今端の老母も起上り　只今迫は麁略に致し悪口云
ふたもお赦しあつて　未来はお助け下されと　頼む心ぞ殊勝なる　上人莞
示と打笑みたまひ　ホホウさもあらんさり乍ら老母が最後は宿世のごう
今より後は佛門に入り　六字の名万帰命せば　非業を滅すにうたがひな
し　イイザ僮に念ぜよと　珠数取り出し称名を　唱へたまへば　アアラ不
思議やかつぎし面の忽に　無始曠劫の悪肉は　面に着いてぞ落ちにける
ハフト一度に有難涙悦び合ふこそ道理なれ　老母は今端の断末魔上人悦
喜浅からず　他力本願得る上は成佛得道疑ひなしと　のたまふ声は佛
の方便　手負は嬉しさ手を合せ　娑婆の名残りにつこりと　笑うて息
は絶にけり　お清はあるにもあられぬ思ひこうなる事も先の世の　定り
事と諦めても　餘りほいない此のお別れ　今端に直るお心を　常にお
持ち遊したら　此の御最後は在るまいに　思へば思へばおいとしやと
あへなき死骸押し動かし　さけび歎けば　与三治も僮に　こらへし涙一

時に落ちて流れて白山の手取の川に水増して　堤もくずるゝ　如くなり
上人制して夫婦に向ひ　老母が佛果を得る上は　正定聚不退の位に
しゆくするは佛の誓　南無阿彌陀佛をおこたるなと　のたまふ声は知識
の引道我は都へ発足と　立ち出でたまへば　御見送り　早東空の朝ぼら
け　空にた棚引く紫の　雲間に放つ光明は　老母が佛果を迎への弥陀
末世に伝る嫁威し　吉崎御坊に名も高き　面の由来ぞ　いちじるし

明治百年記念

伊勢神宮奉納

真桑文楽

福田正澄

印

竹本岐正

〔裏表紙〕